八王子便り（8）

前便で、私の住む北野台はエルサレムの旧市街とほぼ同じ広さである、とお伝えしました。エルサレムは東にキドロンの谷、西にヒンノムの谷があり、この二つの谷が南で合流し、死海にくだってゆきますが、北野台団地は、北と南が谷に挟まれています。南には、谷の上端に沿って 650 メートルほどの歩道が設けられ、その斜面には桜が植えられ、八王子らしく、大きな桑の木も繁っています。

歩道の脇には、ところどころ、有志の方々が色とりどりの草花を植えてくださり、歩く者を楽しませています。木々の合間からは、はるか遠くに南大沢の高層住宅群が見わたせ、東側には八王子セミナーハウスのある丘が連なり、西側の林のなかには「絹の道」（右写真）が通っています。

「絹の道」は、幕末、武蔵の国で生産される生糸をいったん八王子に集積し、開港されたばかりの横浜港に運ぶ街道でした。明治中期に甲武鉄道（現中央線）が、明治末年には横浜鉄道（現横浜線）が敷設されるにおよび、「絹の道」は廃れました。

団地の西の丘から「絹の道」を少し南にくだったところに、八王子市『絹の道』資料館（右写真）があります。そこは、当時、生糸問屋として財をなした八木下要右衛門の屋敷跡だといいます。

さて、「八王子便り（7）」をお送りした翌日の夕方のこと、団地南端の歩道の谷側に白いブローチのようなものが眼にとまりました。近づいてみますと、なんと、谷の斜面に繁る蔓草に咲く純白の花でした。その葉からみて、どうやらウリ科の植物らしいのです。ということは、カラスウリの花かもしれない。そう思って、妻のスマホのカメラに収めてもらい（次頁写真）、家で調べてみますと、案の定、カラスウリの花でした。

晩秋、濃いオレンジに色づくカラスウリは、その実を手に取って振りますと、乾いた殻にいく粒かの種が当たって、寂しい音を立てます。その音に耳を傾け、ひとりで遊んだ子供のころのかすかな記憶が留められています。でも、その花を見たのははじめてでした。しかも、意外なことに、花弁から細い糸がたくさん出て、ヴェールのように花弁を囲んでいます。この花は夕べに咲いて朝にはしおれてしまう「一夕花」であるとのこと。随分前に「意外性の魅力」という雑文を書いたことがありますが、まさにカラスウリの意外な魅力の嬉しい発見でした。

この「発見」があってから、団地内の大公園の片隅の藪にも、団地に北面する

広場の端の灌木にも、カラスウリが蔓を絡ませ、夕方から、純白の花をほころばせていることに気づかされました。20 年もの間、そのことを知らずに住んでいたことになります。人は、関心を寄せてはじめて、ものが「見える」ようになるのですね。

この 3 月以来、週日のほとんどを自宅で過ごしてきましたので、散歩の合間（?）を利用して研究にも打ち込み、いくつかの成果をまとめることができました。以下、そのうちの 2，3 の成果を紹介させてください。

そのひとつは、『ダマスコ文書』を翻訳し、比較的詳しい解説と註を付した原稿を仕上げたことです。

19 世紀末、エジプトのカイロにあるユダヤ教のシナゴーグの「ゲニザ」（使用されなくなった文書の保存庫）で発見された膨大な数のヘブライ語写本のなかに、研究者が後に『ダマスコ文書』と名づける文書がありました。後 11 世紀ころの写本です（右上）。

『ダマスコ文書』と名づけられたのは、これを書き残した人々が自分たちのことを「ダマスコの地において新しい契約に入る者たち」と理解していたからですが、そこに見られる律法理解は正統ユダヤ教とは一線を画していました。しかし、どのような人々がこれを書き残したのか、正確なことはわからないままでした。

ところが、20 世紀半ば、死海の北西岸、クムランの洞穴で発見された死海文書のなかに、同一文書の断片が多数発見されたのです（右下）。それによって、『ダマスコ文書』は、旧約聖書写本をはじめとする死海文書を残した人々が書き記した文書であることが判明しました。彼らは、前 2 世紀半ば、「義の教師」の指導のもと、エルサレムの主流派から袂を分かち、荒野における禁欲的な生活を選んだとみられるユダヤ教の一派でした。彼らは、便宜上、「クムラン教団」と呼ばれます。

初代キリスト教徒たちがそうであったように、この教団でも、自分たちはかつてエレミヤが預言した「新しい契約」（エレ 31:31 以下）の民であり、「光の子ら」である、と自己理解していました。そして、律法の厳格な遵守と違反者への処罰を定め、思想的には、徹底した善悪二元論、祭司と王という二人のメシアの待望、間近に迫る最後の戦い、等々を掲げて、自分たちだけの閉じられた生活を営もうとしていました。その点では、「神の国」の完成とキリストの再臨を待ち

望みつつ、通常社会における日常の生活を大切にしようとした初代のキリスト教徒たちとは対照的でした。果たして、後 68 年、クムランはローマ軍に占領され、200 年前後におよぶ教団の歴史は幕を閉じたのです。

このような『ダマスコ文書』は、初代キリスト教が袂を分かったユダヤ教の一面を明らかにしてくれます。それと同時に、イエス・キリストによる罪の赦しと律法からの解放を説いた初代キリスト教の特色をより鮮明に照らし出してもくれましょう。文書の翻訳と解説は、教団規則を記した文書『共同体の規則』などとともに、初秋には、順不同で刊行されはじめた『死海文書』（ぷねうま舎）第 I 分冊として刊行さる予定です。

この間、以前から託されていた、楔形文字を刻んだ粘土書板一点の解読とも取り組みました。この書板は、法典で有名なハンムラビ王の即位より 30 年ばかり前（中年代説によれば、前 1819 年）、聖書がアブラハムの出身地と伝えるメソポタミアの都市ウルで記された宅地売買の証文でした。内容は、1 サル（約 36 ㎡）の宅地が銀 10 シクル（約 85g）で譲渡されたことを詳しく記し、9 名の証人と日付を付したものでした。それだけのことですが、その背景を確かめるために、当時の類似文書を詳細に調べてみますと、興味深い事実が浮かびあがりました。

当時のウル市内において、居住家屋の建坪とほぼ同一の宅地面積は平均 0.9 サル（約 32 ㎡）であったこと、立地条件により差異が大きい価格も、平均すれば、1 サルあたり銀 27 シェケル（約 224g）と計算されることなどが、それです。この時代、ウルはラルサ王国の支配下におかれていました。そこで、主都ラルサから出土した同種の文書群と比較してみますと、主都ラルサのほうが、宅地面積においてウルの 1.4 倍、価格面では 1.8 倍となることも判明しました。それによって、前 2 千年紀前半の古代メソポタミアにおける市民生活の一端が明らかになりました。

そのほか、昨秋、上智大学で開催された聖書講座で発表した「旧約聖書における物語文学の構造と主題」を文章化しました。ルツ記、ヨナ書、エステル記の 3 書を「物語文学」と呼びならわしますが、それらの文学構造と主題を探った論考になります。目下、2019 年度の旧約学会での会長講演「センナケリブの退却」ならびに無教会研修所の特別講義「旧約聖書と古代オリエント―ヒゼキヤとセンナケリブ」を一つの論稿としてまとめています。

というわけで、新型コロナウィルスの感染が拡大するなかでも、研究者としての楽しさと大変さを味わっています。

皆さまにおかれましても、新型コロナウィルス感染による「ステイ・ホーム」を利用して、有意義な学びの日々をお送りくださいますように。

（広島・長崎原爆の日の後に、月本昭男記。2020.8.10）